

サポートブックの活用とその評価

～産業現場等における実習及び支援費制度による各種サービスの利用を通して～

下野令子 清水雅恵

研究協力者：得能栄子 永井淑子(希望ヶ丘デイサービスセンター kakko)
大野鮎美(ワークショップひなげし生活支援センターほっとらいん)

1. 昨年度までの取り組み

サポートブックの研究を始めて、今年で3年目を迎えた。

平成15年度は、小学部と中学部で保護者が「サポートブック作成教室」を立ち上げてサポートブックの作成を始めたが、高等部は保護者が参加しなかったので教師中心に作成しようということで研究がスタートした。小・中学部の保護者が作ったサポートブックは記述式であったが、高等部では教師が項目を作成して保護者に記入してもらう埋め込み式のものにした。こうして、本校の中で2つの形式のサポートブックが存在することになった。実際に、高等部において教育実習や産業現場等における実習（以下、現場実習）などで活用してアンケートによる評価を行ったところ、支援者にとっては記述式と埋め込み式との間に大きな差は認められなかった。しかし、保護者の評価は埋め込み式のほうが低く、保護者がサポートブックを積極的に使おうとは思っていないことがわかった。

2年目である平成16年度の研究では、高等部2、3年生の現場実習用サポートブックの作成を行うことにした。アンケート分析の結果から、保護者が作成したサポートブックは自由に過ごす場面には向いているが、高等部の現場実習で使う場合にはもう一歩進んだ支援や対応の仕方などの情報が必要であると考えたからである。はじめにサポートブックに必要な項目を検討し、昨年度評価の高かった記述式のサポートブックを教師が中心となって作成していった。そして、現場実習の際に一般事業所や福祉施設に持参して活用してもらい、前年度と同様にアンケートを行った結果、評価は前年度より上回った。要因としては、一人ひとりの配慮することまで細かく記入できたことや、障害をもつ子どもに対して「できない子」ではなく「支援があれば可能性をもつ子」という視点を支援者に提示できたことなどが考えられた。また、サポートブックの作成を通して家庭と学校での様子の情報交換をすることにより、保護者と教師の相互理解が深まったというメリットもあった。

2. 今年度の研究の概要

昨年度までの研究の成果を受けて、今年度は4月当初から「現場実習用サポートブック」の作成に取り組み、高等部2年生及び3年生の前期現場実習から使用することができた。活用してみた各現場実習先からの反応は昨年と同様「あると参考になる」といったものであったが、サポートブックが具体的にどのように活用され評価されているか、また問題点は何かを明確に捉えたいと考え、福祉施設の協力を得て聞き取り調査を行うことにした。さらに、協力を依頼した施設のニーズにもできるだけ応えたいと考え、サポートブックを使ってみた聞き取りに加えて、ショートステイやホームヘルプサービス利用の際にはどのようなサポートブックの項目も必要かを聞いて加えることにした。

3. 研究協力施設について

研究協力施設への依頼にあたっては、卒業生が就労していたり在校生が現場実習を行ったりしている実績があり現在高等部の生徒が比較的多く支援費の登録をしている福祉施設2カ所をお願いすることにした。一つは希望ヶ丘の「デイサービスセンター kakko（カッキー）」、もう一つはワークショップひなげしの「生活支援センターほっとらいん」である。

(1) デイサービスセンター「kakko」の概要

「希望ヶ丘」は、昭和44年に開設された入所の知的障害児施設および知的障害者更正施設である。平成16年現在、知的に障害のある約100の方が暮らしている。施設援護のほか、ショートステイ事業、「すみれ荘」「さつき荘」「ひばり荘」「のぞみ」「大地」を加えた5つのグループホームを運営している。平成16年度から新規事業として、デイサービスセンター「kakko」を開設し、知的障害者の地域生活を積極的に支援している。「kakko」では成人ばかりでなく就学児の日中活動もサポートしており、本校の児童生徒も夏期休業中や振替休日、土曜日や日曜日など、学校が休みの時に利用している。

表1 「kakko」の現場実習・就労・支援費登録者数

	前期現場 実習者数	後期現場 実習者数	就労者数	支援費 登録者数
平成16年度	0	1	2※	6
平成17年度	0	0	—	7

※ デイサービス

平成16年度と17年度の高等部生徒による「kakko」の現場実習・就労・支援費登録者数は表1のとおりである。

(2) 「生活支援センター ほっとらいん」の概要

「ワークショップ ひなげし」は、平成16年4月に開所した知的障害者通所授産施設であり、その前身は社会福祉法人「ひろびろ福祉会」の小規模施設「ひなげし共同作業所」である。「ひろびろ福祉会」は他に身体障害者通所授産施設「ひろびろ作業所」、障害者小規模施設「ポピー」、グループホーム「ひなた荘」も運営している。平成17年度に開設された居宅介護事業所「生活支援センター ほっとらいん」は、ホームヘルプ、ショートステイ、ガイドヘルプなどを行っており、担当者の大野氏はそのコーディネーターとしても活躍されている。本校の児童生徒も夏期休業中や振替休日、土曜日、日曜日など学校が休みの時や緊急時に利用している。

表2 「ワークショップ ひなげし」の現場実習・就労及び「ほっとらいん」の支援費登録者数

	前期現場 実習者数	後期現場 実習者数	就労者数	支援費 登録者数
平成16年度	1	1	1	—
平成17年度	2	2	—	8

平成16年度と17年度の高等部生徒による「ワークショップ ひなげし」の現場実習・就労及び「ほっとらいん」の支援費登録者数は表2のとおりである。

4. 本校児童生徒の夏期休業中における施設の利用状況

今年度、進路支援部で本校の児童生徒の夏期休業中のショートステイ等の利用について保護者にアンケートを行った。アンケートの回収は、小学部で14人中11人（うち「利用していない」は1人）、中学部で16人中13人（うち「利用していない」は5人）、高等部で26人中24人（うち「利用していない」は6人）であった。各種サービスの利用者数については表3のとおりである。回答があった中でも、支援費によるサービスを受けていない児童

生徒がいたり、中学部や高等部の陸上部に所属している生徒の中には夏休みの練習に参加するためにこれらのサービスが必要でない生徒もいる。しかし、総利用回数を利用者数で割ってみただけで

表3 夏期休業中の支援費制度による各種サービスの利用者数

	利用者数	ショートステイ	デイサービス	ホームヘルプ	学童保育	のべ利用回数
小学部	10	16	27	9	43	95
中学部	8	64	0	45	28	137
高等部	18	117	0	27	33	177
合計	36	197	27	81	104	409

も、一人平均10回以上の利用がみられるなど、児童生徒の生活に各種サービスが定着してきていることが伺える。

表4は、本校の児童生徒がどのような事業所のサービスを受けているかまとめたものである。夏期休業中に利用した施設は19カ所で、そのサービス内容は、ショートステイや児童デイサービス、ホームヘルプ（主にガイドヘルプや送迎サービス）などであった。その他、支援費によるサービス事業ではないが、社会福祉法人「金沢手をつなぐ親の会」が行っている学童保育（ふれあい交流室やすずかけクラブ）もよく利用されていた。児童生徒に

表4 利用した施設とそのサービスの種類および利用者数

施設名	サービスの種類				各学部の利用回数			総計
	ショートステイ	デイサービス	ホームヘルプ	学童保育	小学部	中学部	高等部	
希望ヶ丘「kakko」	○	○			0	8	11	19
ほっとらいん	○		○		9	42	62	113
仏子園ステーション	○	○	○		11	13	16	40
ヘルパーステーション「あらいぶ」	○	○	○		10	1	2	13
オープンハウスクローバー	○				0	2	0	2
たけまた友愛の家	○				0	3	10	13
若草作業所	○				0	0	4	4
やまびこ学園	○				0	0	11	11
国立療養所医王病院	○				7	0	0	7
石川療育センター	○	○			6	3	1	10
サービスセンター虹の家		○	○		2	4	1	7
NPO法人ガフ			○		6	18	3	27
ケアネット・ハピネス			○		2	0	0	2
NPO法人ライフステージ			○		0	4	2	6
ケアサポート金沢			○		0	6	0	6
NPO法人WACかがやき			○		0	5	7	12
NPO法人エポック			○		0	0	14	14
ふれあい交流室		○		○	9	12	21	42
すずかけクラブ				○	33	16	12	61
					95	137	177	409

よって居住地や経歴、必要とするサービスの内容が違うため、傾向を読み取ることは難しかった。しかし、個々のニーズによって各種施設が提供しているサービスを、多岐にわたって選択している様子が伺えた。

5. 施設からの聞き取り

聞き取りは、各施設へ3回ずつ訪問して行った。1回目は前期現場実習終了後で生徒達が各施設の支援費によるサービスを最もよく受けている夏期休業中に行った。その時にデイサービス等に必要項目を聞き出し加筆して、後日アンケートとともに持参した。3回目は後期実習終了後に行き、アンケートを基にサポートブックの総括を行った。

以下、聞き取りとアンケートの記述部分を

- ①サポートブックの利用状況や感想
- ②サポートブックで記述されたことのほかに知っておきたいこと
- ③デイサービスの際に必要なと思われる項目
- ④各施設で行っているアセスメントとの違い
- ⑤その他

の5点についてまとめた。

(1) デイサービスセンター「kakko」の聞き取りから

①サポートブックの利用状況や感想

- ・サポートブックは役に立っている
- ・初めての生徒を受け入れる時には目を通して
- ・細部にわたって利用者の状況が把握できてよいと思う
- ・服薬や医療面に関することは、書いてあるものについては確認している
- ・利用者がいつもと違う行動をした場合には、サポートブックを見直すようにしている

②サポートブックで記述されたことのほかに知っておきたいこと

- ・余暇活動に関しては、利用者に合わせて嫌いな活動は避けたり、好きな活動を参考にしたりして決めることがあるので今後充実させて欲しい部分でもある
- ・その子の調子の良い時や悪い時の様子を知りたい。それによって活動への誘いかけなどに変化をつけることができるかもしれない。
- ・健康、服薬の項目がもう少し詳しく記載されていると助かる。例えば、薬の名前やその効果、かかりつけ医（病院）の連絡先、アレルギーの有無など。書いてある人とそうでない人がいるので、統一した形でしっかりと書いてあると助かる。
- ・本人の安定のため、学校の方針と違うことは基本的に行わないようにしたい。また、基本的な生活習慣の指導や、指導のポイントの置き方などが同じ方がよいので、学校の支援目標なども知りたい。書いてあればそれに即した声かけなどができると思う。
- ・パニックや困った時の対処の仕方や、パニックの時にも「こういうことをしたら安定する」といった興味を示すものの記述があればよい

③デイサービスの際に必要なと思われる項目

- ・外出の時
- ・入浴に関して

④各施設で行っているアセスメントとの違い

- ・保護者との面談でも聞いて重なる部分はある
- ・保護者にとっては当たり前すぎて、聞き取りの際に出てこない情報を補足してくれる場合がある

- ・保護者からの聞き取りなので「学校での様子」「学校での対処の仕方」は出てこない
- ・サポートブックでは現状に即した実態になっているが、聞き取りではそこまで把握するのが難しい
- ・サポートブックなどから、注意しなければならないことがあるとアセスメントの欄外に書いている
- ・「こうしたときにはこう促す」という書き方が、アセスメントとは違う
- ・個人ファイル、身辺的なこと（食事や排泄）、健康・服薬、身辺自立、余暇利用、対人関係、心理的安定などについては、日中利用者を預かるときに必要なことは聞いている。サポートブックの方がより詳しいことがある。

(2)「生活支援センター ほっとらいん」の聞き取りから

①サポートブックの利用状況や感想

- ・持ってきているとありがたい
- ・事前に知ることができる情報としては十分であり、施設での実習中は問題なく過ごすことができた
- ・「どうしたらいいのだろう？」という疑問などをあらかじめ取り除いてくれるよい資料だった
- ・とても見やすく、本人の特徴も記入されているので、たいへん参考になった
- ・アセスメントの時も利用している
- ・自閉性障害の人に関しては、サポートブックは有効であると思われる
- ・スタッフによってはサポートブックを見るのが「先入観」にもなるが、食事・排泄・服薬などは見せやすい。緊急の場合以外は、まず何も見ないで利用者と接してもらってから見せるようにしている。

②サポートブックで記述されたことのほかに知っておきたいこと

- ・ショートステイは基本的に集団なのでコミュニケーションの方法をもっと詳しく知りたい
- ・余暇や休日の過ごし方
- ・食事開始時間などは自宅に合わせて調節できるので、自宅での過ごし方を知りたい
- ・服薬について。朝晩に飲むことが多く、昼は少ないのでサポートブックの記述も少なくなるのではないかと。薬の飲み方や名前も聞きたい。
- ・「どんなことが好きなのか、嫌いなのか」ということを知りたい
- ・家での様子（普段何をして過ごしているのか）を知りたい

③デイサービスの際に必要なと思われる項目

- ・ガイドヘルプサービスも行っているため外出の際の項目（移動やバス、外での活動の様子など）があるとよい

④各施設で行っているアセスメントとの違い

- ・ADL関係、コミュニケーション、行動面などはほとんど共通している
- ・項目の量や身辺自立に関すること、「本人の特性」について記されているところは同じ
- ・ADLについてはアセスメントの方が、より細かいこともある
- ・今までの経歴や自宅の様子はより詳しくアセスメントで聞いている
- ・保護者へのアセスメントの中で、自閉性障害の子で「できていない」と書いてある場合でも慣例や関係性の中でできないだけであり、実際にはできていることもある。そういった時には、教師からの視点が記述されているサポートブックが参考になること

もある。

⑤その他

- ・本施設でも支援計画書を作っており、保護者の同意のサインはもらっているが、他の施設やガイドヘルパーの方達と「連携」していく時に、個人情報の保護という視点で悩んでいる。個人情報の取り扱いなので対応はどうしているのか？
- ・サポートブックを作る際にどのような方が関係しているのか？先生達だけで作っているのか？家族の方も参加しているのか？

(3) アンケートの集計から

アンケートの有効回答数は計6で、「kakko」から3、「ほっとらいん」から3であった。まず、問1の「サポートブックは役に立ちましたか」では、5段階評価で「役に立った」が5、「少し役に立った」が1と、各作業所では役立つものとして受け止めてもらっているようである。

表5 役に立った項目

問2の「どの項目・情報が役に立ちましたか」では、項目を書き出したものにいくつでも○をつけて評価してもらった結果が表5である。「役に立った項目」については昨年度も同様のアンケートを行っており、その際の有効回答数は17であった。昨年度の数字を今年度と単純に比べることはできないが、昨年度の役に立った項目で回答が多かったのは「対人関係」と「作業学習での様子」であった。昨年度のサポートブックは「現場実習用」であり、集団の中で施設指導員の指示を受けながら仕事をする場合には必要とされたと推測された。

項目	今年度の合計	昨年度の合計
こだわりや癖	6	1
パニックや困ったときの対処の仕方	6	1
障害からくる本人の特性	5	7
食事	5	5
コミュニケーション	4	—
対人関係	4	14
余暇活動	4	3
心理的な安定	4	—
学校での様子	3	—
健康	3	5
身辺自立	3	7
個人ファイル	2	6
作業学習での様子	2	12
外出・移動	2	—
買い物	1	—
宿泊	1	—
入浴	1	—
学力	0	7

今年度はアンケートに答えてくれたすべての指導員が「こだわりや癖」「パニックや困ったときの対処の仕方」などを役に立った項目として選んでいる。支援費制度による各種サービスの場合では子どもの日常の様子に重点を置いてサポートブックが使われていたと考えられる。

項目は増えたとはいえ、昨年度も今年度も項目に沿って記述しており、特に高等部3年生のサポートブックは昨年度のものに加筆や訂正を行った程度で内容的にはそれほど違うことを記述しているわけではない。支援の方向性によって、サポートブックの読まれ方や役に立つ項目が違ってくるのではないかと考えている。

6. 本校のサポートブック

(1) 聞き取り調査の結果を踏まえて

本研究で施設からのアンケートや聞き取り調査を行ってきたが、これらの意見を参考に

してサポートブックの大項目の見直しを行った。変更したり追加したりした大項目は表6のとおりである。

(2) 私たちの考えるサポートブック

私たちは、サポートブックを作る目的として「子どもが学校や家庭以外の場所でスムーズに過ごせるためのもの」ということを念頭においてきた。そこで、子どもたちが安心して支援者と過ごすことが

できるように、保護者の方の協力を得てサポートブックを作ってきた。子どもをよく知る学校(担任)と保護者が協力することで、より多面的に子どものことを伝えられるのではないかと考えたからである。しかし、サポートブックは決して「必ず読んでこのとおりにしてください」と強制する性格のものではなく、参考にしてもらえればよいというくらいに考えている。また、形式は決まったものではなく、たくさんの項目の中から子どもに合わせて選択したり新たな項目を作ったりして記入している。

サポートブックは、子どもの様子やその支援についてだけでなく作成者の気持ちも記述することができる。しかし、使用するのは始めのうちの短期間であり、あとは支援者がそれぞれのやり方でその子どもとの関係を作っていくものではないかと思われる。また、項目をいくら工夫してもそれだけでは伝えきれない点もあり、決して万能とはいえない。

(3) サポートブックのもつ矛盾点

サポートブックは、第三者が障害のある子どもとかかわるときに知っておくとよい情報をまとめたものであるが、作成していく中で矛盾を感じる部分も出てきた。

富山大学教育学部の武蔵博文助教授によると、サポートブックは本人を中心にして本人のニーズに基づいて書かれるものである。しかし、実際に作成してみると、サポートブックを使う支援者のニーズを意識して作っている部分も大きい。また、自閉症スペクトラムの子どもの場合には、その子どもに接する時にして欲しくないことや知っておいてほしい行動パターンがあるために、マニュアル的になってしまいがちである。一方で、人間関係は実際に接する中で深まっていくものであるとも考えるので、サポートブックがマニュアルでありたくはないという思いもある。

7. サポートブックを作るにあたって

高等部ではこの3年間、サポートブックの研究に携わる教員が中心となってサポートブックの作成に取り組んできたが、今後、より多くの人をサポートブックの作成に携わることができるよう「サポートブックの作り方」をまとめ資料1のとおり記入例を作成した。本校では、中学部からの連絡進学の子は保護者が作ったサポートブックを持っている場

表6 サポートブックの大項目の変更と追加

	大項目	内 容
変 更	余暇活動 コミュニケーション	家での活動と学校での活動に分ける 対人関係から独立させる 受信と発信に分けて記述する
	集団での様子	集団が好きかどうか、集団に入れるかどうか
追 加	外出・移動	外出が好きかどうか 初めての場所のこだわり 移動方法(徒歩での移動、路線バスの利用)
	買い物	外出の伝え方 品物の選び方、お金の支払い方 指定されたものを選ぶかどうか 就寝時の様子(電気、時間、儀式等)
	宿泊 洗面・歯磨き 入浴 心理的な安定	睡眠の様子(眠りが浅いなど)、起こし方 好きかどうか、一人で洗えるか 調子のいい時と悪い時の見分け方

合もあるが、サポートブックを作成した経験のない保護者の方をはじめ教員の方の参考になれば幸いである。

(1) サポートブックを作る前に確認しておきたいこと

サポートブックには個人情報が多く含まれているので、支援者に開示するという念頭をおきながら作成することが大切である。本校高等部の場合は、サポートブックを学校が主導ではあったが保護者と話し合いながら作成してきた。

また、支援者に対しては、サポートブックの利用を強制するものではないと考えている。支援者あるいは子どもによってはあまり必要でない場合もあり得ると思われるので、支援者主導で使ってもらえばよいと考えている。

サポートブックを作成する意図は、送り出す側が安心して子どもを支援者に託すことができるという点にある。支援者と子どもが早く慣れることができるように、そして信頼関係を築くためにもサポートブックの役割は大きいと考える。

(2) サポートブックの作成の手順

①大項目を決める

- ・必要と思われる大項目を選択する
- ・子どもに応じて、大項目を変えたり新たに大項目を付け加えたりする

②小項目に沿って記入する

- ・取捨選択、変更や追加をしながら必要と思われる小項目に記入していく。適切な小項目がなければ、「配慮していること」を設けると書きやすい
- ・大項目1つにつき1ページを基本とするが、書ききれない場合は **食事1** **食事2** のように番号をつけて表す

③最初から最後まで目を通す

- ・子どもの姿を想像しながら読み、足りないと思われる内容があれば付け加える

④大項目の順序を決める

- ・読んでもらいたい、知っておいて欲しい大項目から並べるなど、使う側も意識しながら決める

(3) サポートブックの記入の仕方・記入例

- ・「できない」ではなく、「○○という支援があれば△△ができる」という書き方をする

例) ×自分からはトイレに行かない

○声をかけると、1人でトイレに行くことができる

- ・具体的な支援とは

例) ・声かけがあれば、あとは1人でできる

・はじめに手を添える

・カードを見せると理解してできる

・「ダメ」と否定するのではなく「○○しようね」と声をかける

など

※資料1の見方

大項目：囲み文字

(例) **健康**

小項目：ゴシック体太字

(例) **体力**

記入の際の注意事項：斜字体

(例) ★具体的に支援の方法を記入する

サポートブック

(顔写真)

附属 花子

学校名: ○○養護学校 学部 年
住 所: 金沢市 ○○ 町
連絡先: 076- -

個人ファイル

名 前: _____
住 所: _____

連絡先

自宅 076- -

携帯() 090- -

ジョブコーチ

生年月日: _____年 月 日
血液型: _____型
身長: _____cm
靴のサイズ: _____cm
★ ボウリングの時にあると便利
服のサイズ: ウエスト _____cm
上着のサイズ _____
★ 作業服が支給される会社・作業所等がある
療育手帳: ★ 例えば 石川県Aなど

健 康

身体上の留意点
★ 手指を動かす時、歩行時など身体上に配慮することがあれば記入する

健康状態
★ 治療中の疾病や気をつけることがあれば記入する

体 力
★ 日常生活だけでなく仕事をやる上で体力面に不安があれば、配慮することを具体的に書く

服 薬

1日の服薬回数と時間
(例) 1日3回(朝、昼、夜) 食後に服薬

薬の種類と1回あたりの量
(例) デバケン 1錠(抗てんかん薬)

薬の管理
★ 自分でできるかどうか

服薬方法について
★ 服薬の際に支援が必要な場合は、具体的に方法を書く

障害からくる本人の特性

行動の特徴
★ 差し支えない範囲で障害名とその行動の特徴を書く
例えば、自閉性障害であればこだわり、行動パターン、コミュニケーションの特徴などがあるが、これらが本人の性格というより障害からくるものであることを伝えたい場合はここに書く。詳しくはそのページを見てもらえるように、例えば「食事」で表す

嫌がること
★ 大きな音、暗いところなどあれば書く

パニック
★ パニックがある場合には簡潔に記し、詳しくは「パニックや困ったときの対応の仕方」の項目を作って記入する

心理的な不安定

(調子の波があり不安定な場合に書く)

★ 心理的に不安定になることがあれば、次の小項目に分けて具体的に書く

原因 ★ 外的な面と内的な面から

様 子

頻 度

対応の仕方

パニックや困ったときの対応の仕方
(パニックがある場合に書く)

パニック(あるいは不適応行動)について
★ 次の小項目に分けて具体的に書く

原因

様 子

対応の仕方

学 力

読み書き
★ ひらがなやカタカナ、漢字の読み書きがどれくらいできるか
(例: 小学校0年生程度)

計 算
★ 四則計算(+、-、×、÷)などどれくらいできるか
(例: 3桁のたし算ができる)

数概念
★ どれくらいの大きさの数まで数えたり大きさを比較したりできるか

時 間
★ 時計が読めるかどうか。(アナログとデジタルの両方について書く)
★ 時間の長さがわかるかどうか
★ 一日の予定をどれくらい理解しているか

日常生活における理解

(「学力」について書きにくい場合)

言 葉
★ どれくらいことばが理解できるか具体的に書く →「コミュニケーション」

数の理解
★ 数唱ができるかどうか。できる場合はいくつまでできるか
★ モノの数を数えられるかどうか

マッチング
★ マッチングできるものがあれば書く(具体物、写真、マーク等)

時間や予定に対する見通し
★ 一日の活動予定に対する見通しがもてるか(必要な手立てがあれば書く)
★ 予定の変更を受け入れられるか。また、予告が必要であればどれくらい前までなら受け入れられるか

コミュニケーション

★ 日常のコミュニケーション手段について理解面と表出面に分けて書く
→ことば(音声、文字)、表情、身振りカード(写真、絵)など

理解面
★ 視覚的に示した方が理解しやすい場合は書いておく

表出面
<要求の仕方>
★ 何かしたい時やしてほしい時の表し方
★ 我慢する、表情に表れにくいなどということがあるれば書く
<拒否の仕方>
★ 嫌な時、したくない時の表し方

コミュニケーション2

挨拶

- ★ 自分からできる、言われればできるなどを書く

対人関係

- ★ 初めて会った人に慣れるまでに時間がかかるかどうか

身体接触

- ★ 身体接触を好まない場合は、どのようにすればいいのか等を書く

好きな話題

- ★ 興味をもっていることなどよく話題にしているコミュニケーションのきっかけになるものあれば書く

作業能力

作業態度

作業内容の理解

- ★ はじめての作業について理解するのに実物や見本が必要かどうか
- ★ 慣れて理解するまでに時間がかかるかどうか

持続性

- ★ 作業を継続できる時間の目安を書く
- ★ 作業内容（立ち仕事と座ってする仕事）やその日の調子によって異なる場合は書く

作業技術

- ★ 手先の器用さ、作業の正確さについて指示の出し方

質問・報告

- ★ できること、配慮すればできることなど書く

社会性

金銭の扱い、買い物

- ★ どの程度お金を数えられるか、例：1000円札の枚数は数えられるが、500円玉が2枚でいくらか分からない
- ★ どのくらいまでのお金の支払いができるか、例：ちよんどの金額なら支払えるが、おつりのある支払い方は難しい
- 公共交通機関の利用（最寄りのバス停：）
- ★ バスや電車を1人で利用できるか
- ★ 利用できる場合は、練習すればできるのか、初めてでも大丈夫なのかを書く
- 電話の利用
- ★ 電話での受け答えができるか
- ★ 携帯電話を持っていれば使用状況

外出・移動

(社会性で書きにくい場合)

外出について

- ★ 外出を好むかどうか
- ★ 歩くことが好きかどうか、どのくらいの距離を歩けるか
- ★ バスなどの公共交通機関を利用する時、マナーを守って乗れるかどうか

初めての場所へのこだわり

- ★ 初めての場所に入れない等のこだわりがあるかどうか
- ★ 対応の仕方があれば書く

買い物

(社会性で書きにくい場合)

品物の選び方

- ★ 自分で選べるかどうか

お金の支払い

- ★ 自分で財布の管理ができるか
- ★ 自分で支払いができるか。できる場合は、その金額はいくらまでか

集団での様子

集団での行動

- ★ 集団でみんなと一緒に活動できるかどうか
- ★ 集団でいることを好むかどうか
- ★ 集団活動に参加しているときの様子

食事

好きな食べ物

- ★ 具体的な食べものの名前を書く

嫌いな食べ物

- ★ 具体的な食べものの名前を書く

外食について

- ★ 無理なく食べられるもの、よく注文しているものを書く
- ★ メニューから選べるかどうか

配慮していること

- ★ 箸、スプーン、フォークが使えるか
- ★ 支援が必要であればどの程度が具体的に書く
- ★ アレルギー等で食べられないもの

身辺自立

- ★ どう支援すればできるかという視点で書く

衣服の着脱

- ★ 支援が必要であればどの程度が具体的に書く（着る時と脱ぐ時、上着とズボンなど必要に応じて分けて）
- ★ ボタンやファスナーの着脱ができるかどうか
- ★ たたむ、ハンガーにかけるなどの片付けができるか

排泄

- ★ トイレに行くよう声かけが必要かどうか
- ★ 支援の程度や具体的な支援の方法を書く

余暇利用

学校での好きな活動

- ★ 休み時間に行っていることや課外活動で取り組んでいること

家での好きな活動

- ★ 1人で、あるいは家族と一緒にしている活動について書く

特 技

休日の過ごし方

- ★ 自宅以外での活動に参加していれば書く（スペシャルオリンピックスの水泳等）

入浴

- ★ お風呂が好きかどうか
- ★ 洗髪等も含めて支援がある場合は、具体的な支援のしかたを書く

宿泊

就寝の様子

- ★ 一人で寝られるか、寝つきがいか悪いか

起床の様子・起こし方

- ★ 自分で起きられるかどうかや寝起きがいか悪いか
- ★ 起こし方のコツがあれば書く

洗面

- ★ 支援が必要であれば具体的に書く
- 歯みがき
- ★ 支援が必要であれば具体的に書く

8. 研究のまとめと今後の課題

(1) 作成者と支援者の共働の必要性

今回サポートブックに関する聞き取り調査で協力をお願いした2施設は、学校教育にも理解が深く協力的であることもあって、サポートブックを上手に活用し、我々が期待する以上にその内容を、真摯に受け止めてくださった。どちらの施設からも「参考になる」という評価をいただいております、各施設における保護者との面談やアセスメント作成の際にも利用されていることを聞くことができた。基本的に「サポートブックに書いてないことは、必要のないこと」のつもりでいたが、特に服薬などに関しては、「服薬していない」という情報を含めてどの生徒にも項目を設けて欲しいという要請もあり、記述者と支援者の視点の違いを感じることができた。こちらの思いこみだけでは、支援者に伝わらない部分も少なくないことを改めて実感できた。これこそ武蔵博文助教授の言われる「サポートブックは作成者・支援者同士の共働」であろう。作成者と支援者が、共働することで、より実践的なサポートブックを作成できると思われる。

(2) 学校と施設における支援の連続性

施設では私たち学校側が考えている以上に、学校でどのような指導がなされているかに対して関心をもっているようであった。そこには、家庭や学校、施設での支援を連続させて利用者である生徒自身の混乱をできるだけ少なくしたいという配慮があり、施設でのサービスをよりよいものにしようという利用者主体の理念がある。今まで就学前の教育機関に私たちが求めてきた情報の提供を、今度は学校が施設から求められるようになってきており、そういった体制が整っていくことこそが「移行支援」であると思われる。平成16年度から本校高等部では進路先に移行支援計画とともにサポートブックを渡している。生徒の実態ばかりではなく支援の一つの方向性を示す記述のあるサポートブックは、移行支援の一端を担うことができるのではないかと考える。

(3) サポートブックと個人情報

聞き取りを行っていく中で、「ほっとらいん」から「関連機関との連携を推進していく際に個人情報の共有が必要であるが、その取り扱いはどのようにしているか」という質問をされた。「ほっとらいん」の方では同意書を作成されているとのことであった。本校高等部では教師が中心となって「現場実習用サポートブック」を作成しているが、その際には必ず保護者に提示して加筆・訂正を行ってもらうなど、保護者と一緒に作るという姿勢で取り組んできた。保護者が開示したくない情報はサポートブックに載せないようにし、また、保護者がサポートブックを必要としない場合には作る必要もないと考えている。

サポートブックは開示することが前提であるが、使用する場合には口頭で支援者に渡してもよいかどうかを保護者に確認を取っている。記述の仕方も生徒の「できない」といったマイナス面を書くのではなく「配慮があればこのような活動ができる」という支援の一方法を全面に押し出している。

(4) サポートブックの今後のあり方

サポートブックの研究も3年目を迎え、形式や内容もある程度形が整ってきた。しかし、サポートブックは公的書類ではなく、高等部の「現場実習用サポートブック」は研究グループの教師が主体となって作成してきたものである。さらに本校には保護者主催の「サポートブック作成教室」があり、中学部の時に作成を始めて現在高等部の生徒になった子どもの保護者もおり、自分の「サポートブック」を持って高等部に進学してくる生徒も増えてきた。その中で、今後も継続して現場実習先にサポートブックに記述してきた情報を提示

していくためには、校内で汎化するようにより書きやすい形式が求められる。本校では現場実習の際に「現場実習用 生徒の実態」を担当が記述しているので、今後はサポートブックの項目と「現場実習用 生徒の実態」の項目をつき合わせて精選して、両者の一本化を図りたいと考えている。

かつて、就学中は「家庭」と「学校」がその子の世界の大部分であった。各種サービスが提供されるようになった今では、保護者にとって学校もまた「障害をもつ人を支援する社会的な資源の一つ」として捉えられていくようになってくるかもしれない。今後いっそう学校に求められる関連機関の連携のなかで、生徒を支援するためのツールの一つとしてサポートブックというものを考えていきたいと思っている。

参考文献：

- 武蔵博文 「障害児のためのサポートブック作成教室の試み」
日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003年
- 丸岡玲子 「サポートブックの作り方・使い方－障害児支援のステレオタイプ－」
(有)おめめどう自閉症サポート企画 2005年